

2011年3月14日

アンケートの要望へのお答え

野村忠良

要望1 《家族》

・病気をしている本人の気持ち、考え方を知ることができればよかった。

[お答え]

母は明治末の生まれで、福岡県の裕福な庄屋の娘でした。立身出世が尊ばれる時代に鉄道省に勤める父と見合い結婚し、父の出世を期待していました。母の話では結婚してから父の親族に歓迎されなかったそうで、父は明治の男性らしく母に親しく接するよりは家父長として威厳を保っていたようで、母は孤独を感じていたようです。娘が二人生まれて、母のお気に入りの次女が7歳で亡くなり、同時に実父も亡くなり、悲しみと寂しさは極限に達していたようです。この時父は母を優しく労わることができず、家事をするようにと厳しく叱責したようでした。

母は、誰にも頼れず、一人で耐えているうちに精神を病み、病院では助けを得られずに生きていく場所としては父の家しかなく、家事も子育ても病気のためにできず、ただ、横になって親族の非難や病気と孤独に耐えている辛い生活であったように私には感じられました。子どもとの心の交流もできませんでした。私には勉強をしっかりと、東大に入り高級官僚になるようにとよく言っていました。そんな中でも、なんとか家事をしなければという思いは強くあったようで、時々立ちあがって炊事や掃除などをしようとしてはすぐに横になりました。

母の気持ちとしては①娘の死を深く悼む気持ち。②父方の親族に悪く思われていることを恨む気持ち。親族から財産を盗まれるという被害妄想。子どもを殺されるという危機感。③父と心が通い合わないことへの絶望。④息子には立身出世してほしい気持ち。⑤誰とも信頼し合えない孤独感。⑥未来への絶望感。⑦家計は貧しかったので、父を責める気持ちがありました。いよいよ収入が足りない時には自分は働かなくてはならないと強く思っていたこと。⑧子どもにはよくしてあげなければならない。・・・等があったと思えます。

その他、母の心にかかっていたことでは、①人からバカにされないように、立ち居振る舞いに気をつけること。家を金持らしく見えるようにしておくこと。身なりをきちんとすること。上流階級に憧れ皇族に親しみを感じていたこと。(母の気位は高かったです。)②父が浮気をしているのではないかといつも疑っていたこと。近所の奥さんが浮気の相手ではないかと疑い(母が私にそう呟いたことがありました。)、その家の窓に石を投げて割ったこと。

孤独の寂しさと絶望感や貧乏に苦しんでいたのですが、誰も話を聴いてくれず、質屋に持って行くものがないかと開けた行李(現代の衣装ケース)の前で声をあげて一人で泣いていた姿を思い出すこともあります。

要望2 《家族》

- ・精神障害者への家族の責任、社会の偏見、特に就職などの家族に対する差別もあるとすれば、どのようなものかもっと知りたい。

[お答え]

- 家族の責任：今でも家族の責任は重すぎます。幸いに親やきょうだいから自立できた当事者は訪問看護等を受けて自分の生活がしやすくなりましたが、ひきこもりとして親のもとで同居して暮すしかない当事者にとっては親しか頼れず、親は親亡き後の不安に苛まれています。障害年金がある人でも自立するには足りません。年金が無い人もたくさんいます。
- 社会の偏見：何をするかわからない信頼できない人と見られます。例えば、あまり深くかかると、病状が悪くなった時には包丁で刺されたりするのではないかと疑われます。結婚相手になると、多くは相手の親から反対されます。精神障害者と名乗っただけで敬語を使ってもらえなくなることもよくあります。
- 家族に対する差別：就職では、職場によってはあまりこだわらずに採用してくれるところもあるでしょうが、所によっては家族に精神障害者がいると分かれば、その介護のために仕事を休まれるのではないかと思われて不採用になることもあるでしょうし、結婚ではもっと強い差別がある場合もあります。

要望3 《医療／相談機関スタッフ》

- ・苦勞を乗り越えていく過程の中で、ひょっとしたら今でもあるかもしれないいろいろな感情や葛藤をもう少し詳しく聞きたかった。

[お答え]

自分が立っている社会での立場は、決して学歴や地位や仕事の実績や家柄ではなく、いつも裸のありのままの自分でしかないのです。その生身の自分には、何も誇れるものもなく、精神障害者の母親から生まれたことがいつも負い目としてあります。母が社会に良いことをしたのなら安心して社会に参加できるのですが、近所の子のガラスを割り、人に挨拶もしない母であったことが今でも恥ずかしいと思えるのです。（そう思えるだけで、母の人生を否定しているわけではありません。事実として受け入れています、単純に恥ずかしいのです。）4回も地域から追い立てられるように転居しているとそう感じるのです。自分が社会に償いをしなければと思っていた少年の頃の感情が消えずに残っています。人に尽くして受け入れてもらわなければならないという強い感情があります。精神保健福祉の優れた専門家や活動家たちの中にと、自分の価値について戸惑い、深く考えてしまいます。当事者とともに居ると、むしろ自分は当事者の側の人間ではないかと思えるのです。大学は中途除籍、専門の学識もない、職歴は重い知的障害がある方や精神障害がある方の生活のお世話をする介助者でした。自分が自信を持ってよい根拠とは何かと考えることがよく

あります。アイデンティティは何か。まだ追求途中です。

また、自分は本当はひどい寂しがり屋です。でも、一人で居ることは平気です。むしろ、たくさんの人とお付き合いすると本当に気を使って疲れるので、一人で自由に行っている方が楽しくて助かるというのが本音です。(それでも人を大切にしたい気持が通い合う時には本当に嬉しいです。)

要望4 《福祉関係者》

- ・本人への支援ももう少し詳しく聞きたかったです。

[お答え]

本人とは母のことと思います。私が子どもの頃に支援があったらという過程でお答えします。

- ①母の話を聴いてくれたり、家事を手伝いに来てくれたりする人がいてくれたら、どんなに心強かったことでしょう。母は、仇から食べ物に毒を盛られるという妄想がありましたから、信用してもらうのは大変なことでしょうが、もし、母が信用できる人がいて支援してくれていたら、本当に助かりました。
- ②母が50歳の時に精神科医療を受けたら、母は見違えるように平穏になり笑顔が見られるようになりました。医療を続けて受けられるような支援が、家族以外の医療関係専門家により為されていたら、ずいぶん違った家庭になっていたと思います。
- ③家族関係の調整を、心理や医療の専門家から受けられていたら、希望が見えてきたと思います。母と父の関係は、会話がなく温かみのないものでした。子どもたちもそれぞれ孤独でした。団らんがある家庭があったら、姉も妹も救われたと思います。
- ④お金がないことも治療中断の一因であったと思います。それ以外にも生活の貧しさによる母の心労が軽減されれば、病状が少しは良くなったかもしれません。
- ⑤母には油絵や習字、生け花など、趣味がたくさんありました。若い頃に描いたという観音像の油絵が家にありました。ピアノも実家にあったそうです。父の死後は、習字や生け花の稽古に励んでいました。どこかでこのような趣味にどなたかと一緒に親しめる場所があれば、もう少し幸福に暮らせたかもしれません。

要望5 《教員》

- ・現在、「子ども」として苦しんでいる者へのサポートとして、今の子どもの状況をつかんでいるのであれば、教えて欲しい。

[お答え]

まったくつかめていません。

要望6 《学生》

・つらい経験をどう乗り越えたのか、周りのサポートが知りたかった。なぜ生き延びられたのかが知りたかった。

[お答え]

1. 周りのサポートとして、

- 父の支援：家計に責任をもち、買い物、炊事を懸命に担ってくれた。話し相手をしてくれた。(家庭内の現実については何も話せなかった。) 勉強を教えてくれた。
- 姉の支援：炊事をときどきが担当してくれた。演者が小学生の頃、夕方に散歩がてらラーメン屋に連れていってくれたことがある。中学生の頃、腕時計を買ってくれた。
- 友だちとその家族の支援：小学校1年の頃、やや離れた所に家がある友だちと親しくなり、家に上がって遊ぶことができた。その母親から可愛がられた。小学5年の頃から離れた地域に住む級友が3人いて、それぞれ遊び相手になり家に呼んでくれた。筆者は親や姉から可愛がられた。それらの友だちや家族に筆者は家の事情は何も話さず、遊んでもらっていた。その内の二人とその家族とは、今もお付き合いをしている。
- 小学校の担任の先生の何人かは、筆者がよく病欠やずる休みをするのに心にかけて下さり、級友たちをたくさん連れて家に見舞いに来て下さったことがある。しかし演者は何も相談できなかった。
- 中学の担任の先生も家庭の状況を察知して心配して下さっていたが、演者を支援する方法がないようで、事情を聞かれたことはなかった。演者も相談はしなかった。
- 高校では各教科の先生が一般的な人生についての相談にのって下さったが、演者は母の事は話さなかった。
- 大学で先輩が話を聴いて下さった。初めて、人に母の事を相談した。演者の努力を肯定して下さり、嬉しかった。
- 仏教寺院の僧侶の何人かが特別に大切にして下さいました。修行に打ち込めた。檀家の方の一人も経済面も含めて親身に助けて下さった。
- 知的障害者施設の職員や入所者、そのご家族の多くの方から大切にしてくださいました。(28歳から16年間勤務)
- 精神障害者の家族会の方から大切にしてくださいました。精神障害者施設の当事者から大切にしてくださいました。地域の保健師や専門家の方々、ボランティアの方々から支えてくださいました。(30歳以降)
- 妻とその家族からの支援はどれほど貴重だったかわかりません。結婚した頃、私はまだ心の深い葛藤に悩んでいましたから、こころの病がある妻に相当の負担をかけていたはずですが。それでも妻は「人生で今が一番幸せ」と喜んで元気に仕事に行けるようになるほど精一杯生きてくれました。妻が癌で亡くなってから3年間は、おいおいと泣きました。
- キリスト教関係の方々からは特別に大切にしてくださいました。(50歳以降)
- 精神保健福祉専門家や関係者の方々から大切にしてくださいています。(60歳以降)

2. なぜ生き延びられたか

- かなり深刻な状況ではありましたが、家族それぞれの状態を総合しての最低限の保護安全性と持続的安定性は辛うじて家庭内に保たれていました。健康な父の強い責任感による支えと私たち兄弟姉妹のまじめさが大きかったと思います。
- 生き延びられなかったのは姉であったと思います。状況に翻弄され、父親からの心理的支援もなく、孤独の中でもがいていました。つらい中でまじめに勉強をし、自分で学資を稼いで大学を卒業し、社会で働いてはいましたが、大学を出た頃から心が荒れ始め、最後は喫茶店経営に失敗して同居していた男性と心中しました。
- このようなことを思い出していると、今でも心が緊張し、当時の絶望的不安感と焦燥感、寂しさが襲ってきます。その中で、子どもなりに人間の生き方を考えていた私は、家にあった戦前発行の講談社の「世界修養全集」に書かれている古今東西の様々な人々の美談を旧かなづかいにもかかわらず読み通したのです。飢えていた心が必要としていたため夢中になって読みました。人間としての道を求めるという求道心は一貫してあったと思います。このことは、縁あって親しくなった人と信頼関係を築くことに大変役にたっています。その延長上に禅宗の修行やキリスト教での学びがあります。
- これらの宗教や読書、人々との交際から吸収した感覚は、私の重要な精神的バックボーンとなり、今の私を形成しています。
- 全身全霊でひたむきに求めるのはいっそうの安心感・肯定感と苦しむ人々の解放です。常時、気持はそのことに集中しています。家族の救済は困難だったことが悲しく、家族を悼む気持が人々の救済に役立ちたいという願いになっています。
- 自殺はまったく思い浮かんだこともありません。生き延びるということが目的だったのではなく、一刻も早く本当の安心できる真実な生き方を見つけたいと求めて生きてきました。そのために福祉施設での仕事を選びました。施設での仕事も、家族会の仕事も自分なりに命を込めて果たしてきました。縁あって周りにいらっしゃる方々が苦しみから救われてほしいと心から願っています。この願いは、自分が劣等感や自己否定癖から脱却したい気持から生まれていると思えます。自分の命と人生をもっとも大切なことに使い尽くそうという願いがあります。これは、たとえばちょうど今回の津波で流された人が無我夢中で辺りの物につかまって、気が付いたら助かっていたという状況と似ています。濁流の中で死なないで助かりたいという根源的な願い、もし自分は無事で目の前に流されている人がいたら、できるだけのことをして助けたいと思う気持と同じです。